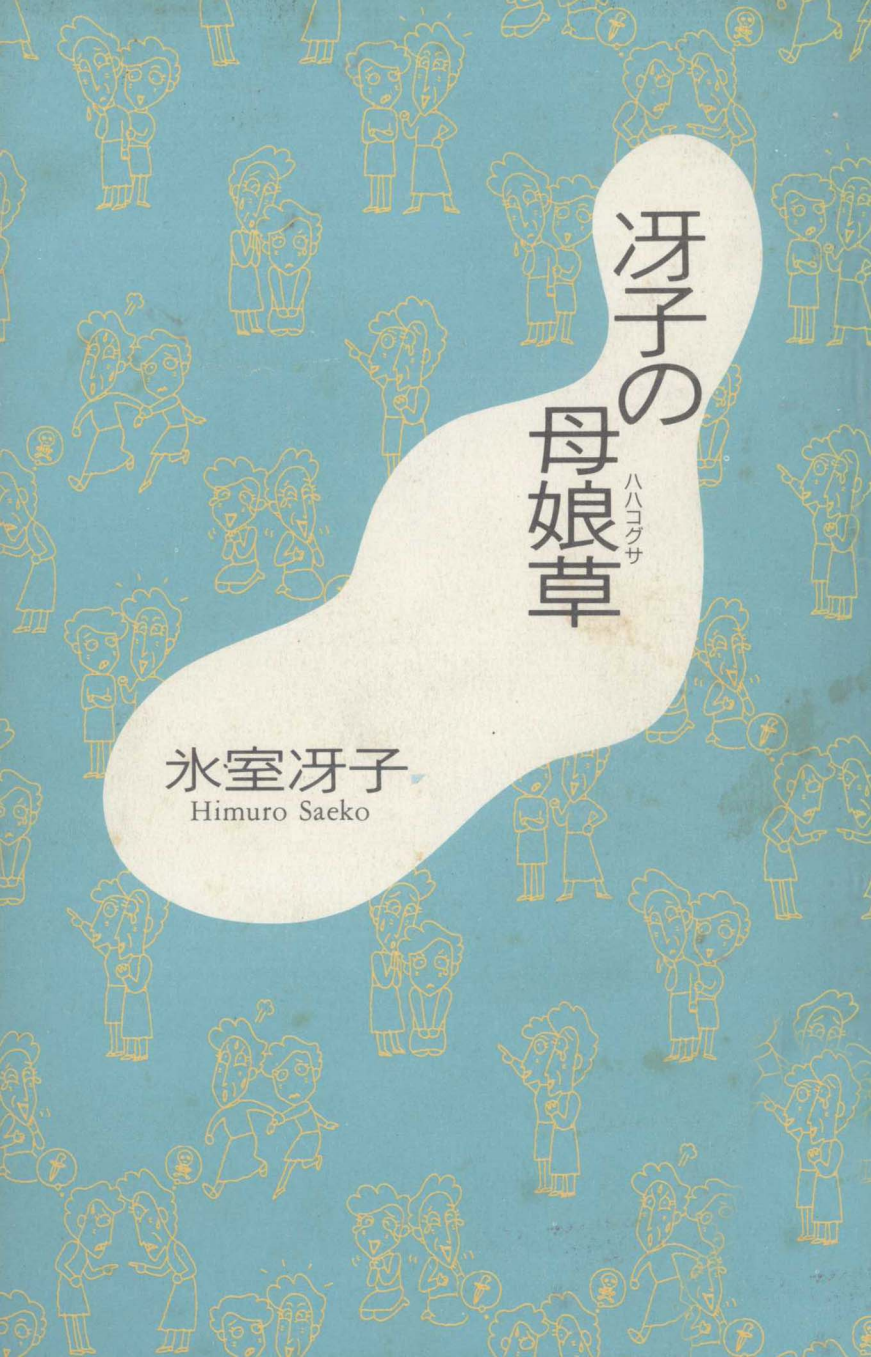




冴子の

母娘草

ハハコグサ

氷室冴子

Himuro Saeko

冴子の
ハハコタサ
母娘草

氷室冴子
Himuro Saeko

初出誌

「青春と読書」1991年6月号～1993年2月号

さえこ ハハコグサ
冴子の母娘草

1993年7月25日第1刷発行

著者／^{ひむろさえこ}氷室冴子

発行者／若菜 正

発行所／株式会社集英社

〒101-50東京都千代田区一ツ橋2-5-10

☎03-3230-6100(編集部)3230-6393(販売部)3230-6080[制作部]

印刷所／大日本印刷株式会社

©S.HIMURO Printed in Japan 1993

ISBN4-08-774019-6 C0095



検印廃止

乱丁、落丁本が万一ございましたら、
小社制作部宛にお送りください。

送料は小社負担でお取替え致します。

本書の一部あるいは全部を無断で

複写、複製することは、

法律で認められた場合を除き、

著作権の侵害となります。



目次

ご先祖さま探訪ツアーはこうして始まった 7

母娘旅行はつねに戦場である 18

恋人と母親のグチの違いを考察する 33

ゴングはすでに鳴っていた 47

私はなぜ恋愛問題で常に冷静なのか、について 62

人間、いやいや人生いたるところ青山せいざんじゃなくて戦場あり

女はトイレで泣いて生まれかわるのだ 89

最終戦争前夜 105

74

そして娘は伝家の宝刀を抜いたのだった

120

母の詫び状

135

母と娘の細雪

147

娘が母に離婚をすすめるとき

162

退職した父よ、もはや娘はあなたの味方ではない

177

ご先祖さま万々歳！

192

毎度おなじみのおひらきで……

207

番外篇・そしてコンサート之夜

222

あとがき

237

意匠  原 研哉

装画  宇田川のり子

冴子の母娘草

ご先祖さま探訪ツアーはこうして始まった

それは母からの一本の電話で始まった。

「サエコ、函館の××が死んだんだよ。交通事故で……」

そういったなり電話のむこうで、母のすすり泣きが聞こえてきた。

函館の××というのは母の弟で、私の叔父さんである。

まだ五十代の若さで、その突然の死には、私も茫然とするばかりだった。

こういつてはナンだが、母方には、当時八十七歳になる祖母がおり、誰も口には出さないながら、いつでもカクゴはできているといった雰囲気があった。

それが、よもや五十代の叔父さんが先に亡くなるとは誰も思っていなかっただけに、親族間にも、かなりの衝撃が走ったらしい。もちろん、わが母も例外ではなかった。

わが母親は悪い人ではないのだが、猪突猛進型の性格をしていて、しかも口が曲がっても「ごめんなさい」がいえない、ガキ大将みたいなところがある。

その性格ゆえに、すでに六十歳をすぎているというのに、兄弟姉妹との間にケンカが絶えなかった。

このときも九十歳にナンナンとする祖母や、とある親族の一家族とは絶交状態にあり、それは双方の家族や多くの親族をまきこみ、あんたはどっちの味方なの的陰悪ムードというか、一触即発というかなんというか、うーむ、ともかく血縁騒乱のさなかにあった。

（うむむ。こりゃ、葬式当日の席の順番から始まって、どっちが先に玉串を奉ったの奉らないのと、第二次災害に発展するかもしれない……）

とおびえた私は、叔父の死にまだ茫然としながらも、

「お母さん、ともかく叔父さんのご霊前なんだから、ケンカだけはダメだよ。あなたは悪い人じゃないんだけど、ともかく口が軽い。相手が傷つくことを平気でいっちゃう。そのくせ、相手が傷ついて怒りだすと、突然、自分ひとりがイイコになって、相手はガマンがたりないだの、気性が荒いだの、根性がネジ曲がってるだのと悪口をいう。褒めコトバは伝わらないけど、悪口はすぐに伝わるのが世間でもんだ。あなたはそれで、たくさん敵をつくってんだからね。あなたが起こす問題のうち、半分以上は、お母さんに原因があるんだからね。そこんとこ自覚して」

と説教するのだけは忘れなかった。

母はさすがに気を悪くしたようで、



「おまえは誰に似たのか、すぐに説教ばかりして……」

ブツブツいいながらも、やはり弟の突然の死にショックを受けていて、いつになくおとなしく電話をきった。思えば、そのときから、母の胸にはあるアイディアが芽生えていたらしいのだ。

叔父の葬儀のあとも、しばしば電話をかけてきて、

「やっぱりさあ、人の命はハカないねえ。まじめに生きてても交通事故にあうんだから。もうすぐ九十にもなろうかって腐れババアが生きてて、人生これからって五十代の男が死ぬなんて。母さん、人生観が変わったよ。人間は、ハカない生きものだア

……」

涙声でシンミリいいながらも、絶交中の祖母の悪口だけは忘れずにいう。

「うん。人生は短いよ。だから、生きてるうちは楽しいことを数えなきゃねえ」

ちよつとしたことで人生観がころころ変わる母の性癖を知り抜いている私は、用心ぶかく相槌^{づち}をうった。

もちろん、人間はハカない。人生はハカない。この限りにおいて、母は正しい。

しかし、わが母はなんというか、ノリやすいヒロイン志向の性格でもあって、歌謡曲とか演歌とか奥様テレビの人生相談とか、そういう情報ソースで得た人生訓やアフォーリズムを、雰囲気だけで口にするところがあるのだ。アッサリ信じるとバカをみるのであった。

案の定というべきか、ある日、電話をかけてきた母は、ひとしきり「人生はハカない」テーマをシミジミと語ったあげく、

「それでね。あんた、まえから、温泉に連れてったげるっていつてたしやう。母さんねえ、ぼんやり考えてたんだけど、××が死んで、ああ、もう今しかないなと思ったんだア。伊藤（母の実家姓で仮名）のご先祖さまのお墓に参りたいのさ。どうだい」

唐突に、いいだしたのだった。叔父の突然の死と、ご先祖の墓参りが、なぜかいきなり、ここでクロスしたのである。

「伊藤のご先祖って、島根だか鳥取だっけ」

「そうそうそう。あんたの曾祖父^{ひいじい}さんが鳥取からきたのが、北海道の伊藤家のはじまりなの。もともとは、鳥取のほうで豪勢に暮らしててき。(と、ここから声に節がついてきて) ♪ 因幡^{いなば}の伊藤にゃホウキはいらぬ。おヌエおヌイの袖で掃くウ」

突然、電話のむこうで、ワラベ歌を歌いだすのだった。

因幡の伊藤家にはホウキはいらない、娘たちは豪華なお振袖を普段からきていて、振袖とおひきずりの裾をひきずって歩くので、それでホコリが掃けてしまう、伊藤家はそれほど大家だよ——というほどの意味である。

子供のころから、その歌を聞かされるたびに、

(アヤしい。どっかの地方の地主に伝わるワラベ歌を、流用してるんじゃないか?)

と私は疑っていたのだが、母はすっかり信じていたのであった。

「ようするに、鳥取にいたころは、たいした力があつた家柄さア。明治十七年、前の年に村が大雨でヤラれたのと、どうせ次男だして身軽さもあつて、千蔵^{せんぞう}祖父さんは北海道の小樽にきたわけさ。そこらへんの富山者^{とも}とは違う育ちだからね。ふん」

「そこらへんの富山者」とは、父方の祖父が、富山県からの入植者であることをアテコスリ、ずばり父のことをいっているのだ。

北海道は、いろんなところからの移住者が集まった寄合所帯、右も左も前も後ろも故郷を捨てて渡ってきた者ばかりで、モトがご大家だろうがなんだろうが、似たようなもののなに、こ

ういうい方をするのは、

(ふーむ。また、父さんともケンカしたな。このフレーズが出てくるとこみると……)

私は冷静に判断したのであった。

「ご先祖さまのお墓っても、場所とか、わかってるの？」

「東京の△△さん（伊藤の縁者）も、何年かまえに、ご本家に挨拶にいったんだと。あそこも、そろそろアブないバーサン抱えてるから、死ぬまえにお墓参りってわけさね。お墓もちゃんとしてたっていうよ」

「ふうん。まあ、お墓の場所さえシツカリしてればね」

「まあ、よくわかんないけどさ。おまえモノ書きやってるし、小説家とかいうのは、そういうの調べるの得手なんだろう？ チョイチョイって調べてよ」

「……………」

「あんたの曾祖父さんが書きのこした日記もあるしさ。それ、今度、送るわ。鳥取ってどこらへんだっけね。やっぱり飛行機でいくのかね」

人生はハカないなりに、目的が出てくると元気になるのか、最後には明るい声で電話をきったのであった。

それからの私は、書下ろしの原稿書きをしつつ、連載の原稿を書きつつ、送りつけられた曾祖父の日記解読に、時間を費やすハメになったのであった。

『明治二拾七年 吉日 利惠幾』と表書きされた和綴じ日記のコピーは六枚。なんと、曾祖父さんはへわれ、いかにして北海道に渡りしか〜という由縁を、明治二十七年にふと思いたって、エンエン書き残したのである。けっこう筆マメなご先祖なのだった。

すべて筆で書かれていて、当然ながら平仮名は一字もない。カタカナまじりの旧字ばかりで、戦後教育をうけた身にはパソコンのマニュアル本を読むより、くたびれた。

しかしようするに、まとめると、鳥取県・伯耆国・河村郡・竹田谷・大字久原村というのがご先祖さまの本拠地らしい。

伯耆国なのに、なんで家伝のワラベ歌が「因幡の伊藤にや……」と、因幡になっておるのか。伯耆と因幡は隣りあっている土地だけれども、こりや違うんじゃないか？

これだけでもう、ご先祖さまの出自はかなりアヤしくなってくるのであるが、電話で問い合わせてくる母に向かって、

「なんかねえ。伯耆国ってあるし、「因幡の伊藤にや……」のワラベ歌はヘンだよ、やっぱり。このさい、ご先祖は家柄がいいとか、そういう幻想は抱かないほうがいいよ」

と理をつくして説明しても、母はすっかり頭がとんでいて、

「まあ、いろいろ難しいことはあるだろうけど。それでね、東京の△△さんに問い合わせたら、△△さんが挨拶にいったのはご本家じゃなくて、別家なんだって。こっちでは分家っていうけど、鳥取のほうでは別家っていうんだねえ。本州はおもしろいもんだね」

しきりと感心するのである。

「別家って、お母さん、送ってくれた日記に、伊藤吉右衛門竹定（仮名）の別家が伊藤為三郎で、為三郎の長男が李治郎、次男が千蔵って書いてあるじゃん。この千蔵があたしの曾祖父さんなんですよ。別家ってのは、日記に出てるよ、ちゃんと」

「あ、そう。それでね、別家さんの住所おしえてもらったんだけど、どうしたもんかねえ。北海道のジャガイモとか夕張メロンとか送ろうか？」

ほとんど、私のいうことを聞いていないのであった。

私の人生観の根深いところにある、

（人はしよせん理解しあえない↓理解しあえないのがアタリマエで、べつに絶望することでもない。ちよつとでも理解しあえればラッキー）

というペシミズムとオプティミズムは、こういうシリアスな母娘関係が育んだのだ。

私は徒労感にうちひしがれながら、別家さんの住所を聞き、大日本地図をひらいて場所を確認した。母はそういうことさえも、

「おまえはモノ書きなんだから、シロウトの母さんが調べるより、シツカリしてる」

などと勝手な理屈をつけて調べようとしなかったのであった。

ご先祖さまツアーについては、母のほうから、

「孫の世話もあるし、旅行も三泊四日が限度だね。それでね、どうせなら出雲大社にもお参り